横田健一先生を偲んで

薗田香融

私たちが敬慕する横田健一先生には、去る二月六日未明、心不全で急逝されました。享年九五歳。この悲報に接して受講生一同深い悲しみに包まれています。

先生は、昭和一五年三月、京都帝国大学文学部史学科をご卒業後、大学院に入学するとともに副手を嘱託されましたが、翌年四月、海軍教授となり、舞鶴の海軍機関学校教官を命ぜられ、昭和二〇年八月の終戦に至りました。戦後は同二一年六月、関西大学教授に迎えられ、その後同六二年三月の定年退職まで、実に四〇年の長きにわたりご在職になりました。その後、京都の仏教大学に迎えられ、平成三年三月まで教授として在任されました。関西大学にご在職中の昭和二四年には、ひとり史学科創設の衝に当られたのをはじめとして、同二九年には大学院修士課程を、同四九年には同博士課程を開設されるなど、史学科の中心としてその充実と発展に尽瘁されました。本学史学・地理学部門の今日の隆盛は、まったく先生のお力によるものといって過言ではありません。

ご専攻の日本古代史では、名著のほまれの高い『白鳳天平の世界』（昭和四八年、創元社）・『日本古代神話と氏族伝承』（同五七年、塙書房）・『日本書紀成立論序説』（同五九年、同上）の三部作をはじめ、多数のご論著があり、とくに『藤氏家伝』をめぐる一連の研究や『日本書紀』の成立に関する原典研究では、前人未踏の分野を開拓されました。また昭和四六年以来、三品彰英博士の遺嘱をうけて日本書紀研究会を主宰し、年報形式の重厚なる論集『日本書紀研究』（第六～二七冊）の相次ぐ編修刊行に尽力され、古代史学界において長らく指導的役割を果してこられました。この研究会は今も毎月一回、京都市内で例会を開催し

ていますが、承れば先生には毎月欠かすことなく出席され、先月二六日の例会にも奥様のお付添でお出かけになり、元気なお声で開会の挨拶をお述べになったと聞いております。最後まで同会代表の重責を果されたことは見事というほかありません。

先生の学風は、恩師西田直二郎博士ゆずりの「堅実なる文化史」といって良いと思います。これは、先生ご自身から聞いた話ですが、大学卒業後の副手時代に、先生は新村出博士の委嘱をうけ、京都の護王神社奉賛会の事業として和気清麻呂公の伝記の編纂に従事され、そのとき収集した厖大な史料を用いてまとめられたのが、先生の出世作「上代地方豪族存在形態の一考察」（昭和二二年）なる論文だということです。この論文は、和気氏も所属する山陽地方の大豪族吉備氏の全貌を明らかにした力作で、戦後まもなく『史林』に掲載され、古代豪族の個別研究の草分けとして学界の注目を集めました。

和気清麻呂といえば、その敵役（かたきやく）の道鏡を思い浮かべますが、先生の若き日の名著『道鏡』（昭和三四年、吉川弘文館）も、またその副産物であったといえるでしょう。これらの論著において先生は、二人の人物像を時代の背景とともに、見事に浮かび上がらせていますが、和気清麻呂については、純忠無比の忠臣であったといわれる反面、中々抜け目のない経済官僚であったことを、道鏡については、醜悪な政僧でありながら、愛すべき一面のあったことを忘れずに指摘するなど、ほのぼのとした人間愛をただよわせ、そこに先生の伝記研究の独特の風格を見ることができます。

学内では、文学部長（昭和三九～四一年）、関西大学理事（同四七～五二年）などの要職につかれ、大学の運営に寄与されるとともに、本学の学史の編纂にも心血をそそがれ、『七十年史』（昭和三一年）の執筆から『百年史』（同六一年）の監修まで、終始熱心に尽力されました。また校友会や教育後援会にも大いに力を添えられるなど、本学に対するご貢献は到底ここに述べ尽くすことができません。

最後に教育者としての先生について一言すれば、先生はいつも口ぐせのように、自分は若い人たちと一緒に古い本を読み、史跡や古社寺を訪ねるのが一番楽しいといわれ、学生の研究会や研修旅行には実にこまめに参加されました。先生ご在職のころの古代史研究会では毎年八月と三月に、飛鳥稲渕のセミナーハウスで二泊三日の合宿を行っていましたが、先生はこの会には必ず出席され、朝から晩まで、みっちりと『日本書紀』や『続日本紀』の講読を行ったあと、夜の一〇時頃から恒例の懇親会となります。こうしたときの先生は、若い学生たちと膝を交え、杯を重ね、飲むほどに酔うほどに談論風発、夜の更けるのを忘れて、心から若い学生たちとのつきあいを楽しんでいられるようにお見受けしました。

六〇歳をお迎えになったとき、ご自作の即興歌を一冊の歌集にまとめ、私たちにも配布して頂きました。『古都行雲』と題する歌集の巻頭には、次の二首を挙げておられます。

今日もまたいにしえあくがれ奈良に来ぬ塔のあなたに白雲はゆく

六十（むそ）とせを石橋たたいてわたりきぬアヴァンチュールもせずギャンブルもせず

第一首目は先生の一生そのものです。いつも若い人たちに囲まれ、古代史の世界を心ゆくまで楽しまれたご生涯は、本当にお仕合せな一生であったと思います。第二首目も、いかにも真面目一徹な先生らしい一首ですが、不肖の弟子たちは、ギャンブルはやらないものの、アヴァンチュールはもとより望むところと、調子にのって失敗したり、行詰まったりすること屢々です。そんなとき先生は、いつも一歩先を力強く歩みながら、適切な指南を与えて下さいました。

どうか先生、私たち野心に富む後輩たちのために、いつまでも導きのみ手を垂れたまわらんことを切にお願いして、お別れの言葉にかえさせて頂きます。

平成二四年二月九日

（関西大学名誉教授）